



フタを開ける

58の歳が固唾をのんでアルミの箱を見守る。かちり。小さな手が、にぶく光る扉の錠の鍵を、と掛けた。止もたいた息を吐き出し、子どもも

を、アルミの箱のタイムカプセルに大切に封印した。

福島から新見へ

「あなたはバリバリ働いてますか」「お花屋さんには夢です」「放射能で育がでなくなつたことは覚えていきますか」。未来に宛てられた数々の言葉は、新見市まで約1.5kmを車で運ばれた。

開通や外務省、岡山県と連携してテロ対策や救命活動の講習を開き、海外で活躍する人材を育成する一環、地域医療にも力を入れる。医師不足に悩む新見市で、分岐施設を備えたクリニックや介護施設を開業、地元には欠かせない存在を。子どもに寄り添う

4月、新見市哲多町にある「公設国際貢献大学校」の資料室で、カプセルはガラス張り、ケースに入れられ、比較的安全性が高い石田小学校庭に埋めこみ、将来掘り起こせなくなるかもしれない。大学校が開封の日まで預かり、守る。

昨年12月、石田小の教室で子どもたちの笑顔が咲いた。フランス在住のオブジェ作家、水木アユ(43)の図工の授業。水木がバリから持参した色紙やペンで冠作りを楽しんだ。「できた、見て」。校長だった村田権一(61)は目を細

ちは口々に歌声を上げた。伊達市立石田小学校、福島県伊達市藍山町の山あい。たまたみ、全校児童入りの小さな学校だ。3月20日、29人は20年後の自分に向けた手紙

業団が参画す



未来への言葉守る

20年後の自分に宛てた手紙も書き添えてカプセルに入れられる伊達市立石田小学校の子どもたち。福島県伊達市

めて見守った。東日本大震災が起きた日の朝、永末はバリの自宅でパソコンを開いた。友人からたっくさんのメール。動画サイトには、母国の街を津波が覆い尽くす映像が流れていた。「行かないさ」。幼稚園で子どもが泣いている映像を見て、突き上げるように思った。どんな形でもいい、子どもたちに寄り添いたいかった。

だが、被災地入りは抱えた永末、切れない思いを隠した。永末、学校が石田小と結び付けた。大地震が起きた後、津波で校舎が流された南相馬市立真野小、東京電力福島第1原発から半径20km圏に校舎がある同市立小高小からもカプセルを預かった。計約160人の児童が未来の自分に向けた言葉だ。

大学校講師の公文俊明(37)はカプセルを預かるこ

20年後に思いはせる

とで「生き方を変えられている」と眩いた。いいかげんな生き方はできない。福島県で未曾有の災害を経験した少年少女が20年後、どんな大人になっているのか、20年の歳月を預かった者として、彼らの前で胸を張れる自分でないとは。取材を通じて関わった記者も、強く、そう思った。

取材ノート

を待った」。震災で各地から支援を受けたから、今度は自分も全力を注ぎ、助げたい、夢を。田小の交流は深まっていた。

だが、被災地入りは抱えた永末、切れない思いを隠した。永末、学校が石田小と結び付けた。大地震が起きた後、津波で校舎が流された南相馬市立真野小、東京電力福島第1原発から半径20km圏に校舎がある同市立小高小からもカプセルを預かった。計約160人の児童が未来の自分に向けた言葉だ。

大学校講師の公文俊明(37)はカプセルを預かるこ

とで「生き方を変えられている」と眩いた。いいかげんな生き方はできない。福島県で未曾有の災害を経験した少年少女が20年後、どんな大人になっているのか、20年の歳月を預かった者として、彼らの前で胸を張れる自分でないとは。取材を通じて関わった記者も、強く、そう思った。

大学校の理事長的野野利(特)は被災した瞬間から、今度は災害からの「卒業」が大事になる。正考える。AM D Aの活動で世界中の紛争や災害を見つけた。被災地の子どもにも、足元に落とし目線から少しずつ、顔を上げた距離を。広い世界を見てほしい。

こんな思いから国際学習を企画した。トルコ地震の被災者に子どもたちはメッセージを送り、昨日ベネズエラ大使を招いた授業も行った。永末の授業も外国を身近に感じてもらった。

「カプセルを開ける時、自分はどうなっていると思おう」。開かれて菅野真末(19)ははにかんだ。「結婚して、タイムカプセルを開ける時には子どもも連れて行きたい」。真末の夢は看護師、プログラムを通じて「世界中の人と私とはつながっている」と考えた。世界の難民を助ける看護師になった。

開封の日まで

石田小の学区内には、放射線量が局所的に高い特定避難場所がある。被ばくを避けるため、学校が伊達市で雨

思い出す。「みんな、絆」という言葉を安く使う。で



伊達市立石田小学校の子どもたちの前で、タイムカプセル作りについて話す「公設国際貢献大学校」の野野利一(福島県伊達市)

を返り、昨日ベネズエラ大使を招いた授業も行った。永末の授業も外国を身近に感じてもらった。学校を代表して東京のトルコ大使館(メッセージを届けたい)は「これまでに18回、このことを調べようと思わなかったけど、興味

も僕たちがしているのが、援活動。支援は「援」が、がて「縁」になり、つながりを深めていくと、ややく絆になる。僕たちは、今、やっつ絆の入り口に立ったんだと思う」(敬称略、文・舩川佳直 写真・鈴木大介)